

視神経炎とは

視神経炎は、目に入った光の信号を脳に伝える神経（視神経）が炎症で障害される病気です。片眼性と、両眼性があり、主な症状は視力低下のほか、視野が欠けたり、全体が白っぽく霞んで見えたりします。炎症の原因は、多発性硬化症や視神経脊髄炎などの中枢性の自己免疫性の病気の1つとして生じるものや、感染症など様々ですが、原因がはっきりしないもの（特発性視神経炎）が最も多いとされています。また、免疫システムの異常により、本来自分の体を守る役割である抗体が、自分の視神経を攻撃して炎症を起こすことも報告されています（抗アクアポリン4抗体、抗MOG抗体）。

■ 症状

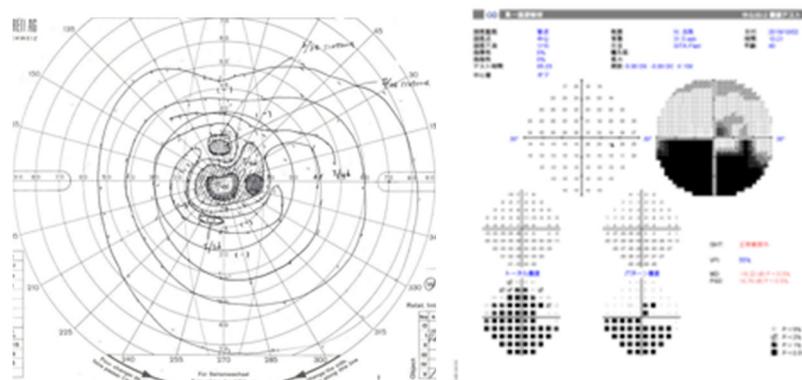
視力低下	急激な視力低下を自覚します
視野欠損	視野の真ん中が見えなくなったり、視野の一部が欠けることがあります
色覚異常	赤や緑が色あせて見えることがあります
眼痛・眼窩深部痛	眼を動かした時に、眼や眼の奥の方が痛むことがあります

■ 検査

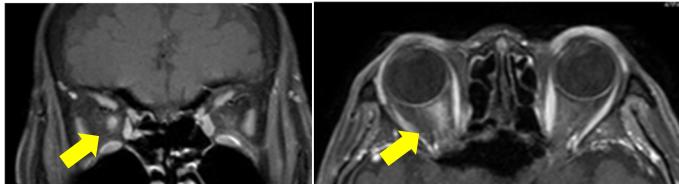
・眼底検査



・視野検査



・MRI検査



視力検査で視力を測定したり、中心フリッカ値測定検査で視神経の光に対する反応をみたり、光干渉断層計（OCT）検査で視神経の厚さを測定したりします。また、眼底検査を行い、視神経の腫れや色などを確認します。視野検査では、視野の真ん中が見えなくなる（中心暗点）、上または下半分が見えなくなるなど、特徴的な視野の異常がみられます。MRI検査で、視神経の炎症や、頭蓋内の病変がないか調べます。採血検査では、感染症や、特殊な自己抗体などを調べ、原因を特定します。

■治療

基本的な治療は、ステロイドパルス療法です。ステロイドパルス療法で効果が得られない場合に、血漿浄化療法や免疫グロブリン療法が行われます。多発性硬化症や視神経脊髄炎と診断された場合は、それぞれの病気に合わせた治療を行います。

- ① **ステロイドパルス療法** 点滴でステロイドの大量投与を行い、炎症をしずめ異常な免疫反応を抑えます。1 クール（3 日間点滴 4 日間休薬）を 1~3 回行います。
- ② **血漿浄化療法** 人口透析に使用する特殊な機械を用いて血液を体外に取り出し、血液中に含まれる自己抗体や炎症に関わる物質を取り除く治療です。1 クール 3~7 回連続で施行（隔日もしくは週 2~3 回）します。
- ③ **免疫グロブリン大量療法** 免疫グロブリンは血液中に含まれるタンパク質で、免疫システムの異常を調節すると言われています。これを、5 日間連続で点滴します。

■当院での実績

当院では、全国よりご紹介頂き、多数の患者さんの治療を行っています。ステロイドパルスの効果が乏しい場合は、神経内科、腎透析内科の先生と協力して積極的に血漿浄化療法も行っています。

■患者さんにお伝えしたいこと

自然に回復する場合もありますが、治療が遅れると後遺症が強く残ることがあります。上記の症状に心当たりがある場合は、眼科受診することをお勧めします。

■本学での取り組み（臨床研究）

1. 視神経炎に対する免疫グロブリン大量療法の治験を行い、現在、国の認可を得て治療を導入しております。
2. 採血データなどを集めて、視神経炎の原因による治療成績の違いや予後などを解析しています。

※視神経炎に関する本学からの学術論文

- ・木村 亜紀子. アクアポリン 4 抗体関連視神経疾患 あたらしい眼科 2019;36(1):17-22
- ・増田 明子, 三村 治. 【視神経症と自己抗体との関連】慢性再発性炎症性視神経症(chronic relapsing inflammatory optic neuropathy:CRION) 眼科 2016;59(1):29-35